第 3 章

戦略が目指すもの

1　2050 年の望ましい将来像

将来の世代が暮らす環境は、今を生きる私たちがどのような行動をするかによって大きく左右されます。

このため、私たちの生命と暮らしを支える生物多様性を、より良い状態で将来の世代に引き継ぎ、市民がその恵みを持続的に享受していけるように、私たちの意思と行動によって実現させる生物多様性から見た 2050 年（平成 62 年）の望ましい将来像を示します。

2050 年の望ましい将来像

多様な生き物が棲む多様な自然環境が広がり、市民は生物多様性が育む恵みに感謝し、自分たちの世代で使い果たしてしまうことなく、持続可能な方法で節度ある利用と保全・維持に努め、将来の世代へ大切に引き継いでいる自然共生社会

将来の世代が暮らす環境は、今を生きる私たちがどのような行動をするかによって大きく左右されます。次ページ以降でイメージ図を示していますが、皆さんご自身で 2050 年の将来像を思い描いてみてください。

2050年の都市域のすがた

生活利便施設が中心部の他に団地や集落の核となる地域にコンパクトに集約され、徒歩や自転車、公共交通機関によって身近なところで日常生活を営むことができます。また人口の減少と共に生じた土地も生かし、住宅地、道路、公園、学校、事業所用地など街中のいたるところで緑が増えていて、その緑は景観や緑陰などの役割に加え、生き物の生息空間としての役割も担っています。

街路樹や河川敷、公園などが形成する水と緑のネットワークは、生き物の通り道や飛び石として利用され、生き物の移動がさかんに行われています。

公園や学校に広がった緑の空間では、バッタやトンボを探す子どもたちの姿が見られます。

また、自然の恵みを生かした交流や行事、地域の人々が協力した緑の管理が行われ、自然とのふれあいをとおした地域コミュニティのつながりが強くなっています。

（イメージ図）

2050年の農山村域のすがた

森林は、地域や企業、市民によって適正な保全や管理が行われて、自然性の高い森林や明るく管理された里山が増え、多くの生き物を育むと共に、災害防止、水源かん養、気候変動の緩和などの機能を発揮しています。

里地では、生物多様性の保全に配慮した生産手法により、広範囲で農業が行われているほか、イノシシなどによる農作物への被害の防止に地域ぐるみで取り組まれています。

里地里山では、昆虫などを探す子どもたちや山野草を楽しむ大人たちの姿、緑豊かな雑木林や水田など、季節の変化に富んだ昔ながらの風景を創出しています。また、地域が育む伝統行事などがまちの魅力づくりに生かされ、次世代に伝えられているほか、都市域住民や観光客との交流、地産地消の取組により、活力に満ちた農山村域となっています。

（イメージ図）

2050年の水域のすがた

河川は、清らかな水が豊かに流れ、河原には植物が茂り、瀬や淵、寄り洲など様々な環境をもった生き物の良好な生息・生育空間となっています。

海から河川源流域まで、また、河川と用水路や水田との間では、水系の連続性が確保され、生き物が自由に行き来しています。ホタルやトンボなどが飛び交い、家族や仲間で散策や生き物観察を楽しむ姿や川で元気よく遊ぶ子どもたちの姿も見られ、市民にとって身近な自然とのふれあいの場となっています。

沿岸部は、河口の干潟が保全され、砂浜や岩礁など自然豊かな海岸が保全・形成されるほか、水域と陸域を移動する生き物に配慮するために、陸地との連続性を確保する取組も展開されています。

青々とした錦江湾は、豊かな生態系が保たれ、水産資源豊かな漁場となり、漁業や養殖業の場、海水浴やマリンスポーツなどのレクリエーションの場として利用されるなど、恵み豊かな潤いと安らぎのある水辺空間となっています。

（イメージ図）

2050年の人と自然との関わりのすがた

豊かな自然の中で、まちも人も元気に笑顔で暮らしています。子どもとお年寄りの交流もさかんで、特に幼少・青少年期においては、自然の中での遊びや体験、生き物に関する読書や学習などを通して、人間と環境との関わりなどについて気づき学び、郷土の環境を誇りとして大切に思う心やいのちの大切さを尊ぶ心など豊かな感性が育まれています。また、家族や仲間で野山・海川を楽しむ姿や四季を味わう季節行事などがあちこちで見られ、地域の伝統行事なども引き継がれています。

自然はみんなの財産であり、その中で私たちは他の生き物と共に暮らし、健康で文化的な生活を営むうえでなくてはならない不変の価値を有することが認識され、日常生活や事業活動において、「地産地消」、「もったいない」、「環境配慮」、「思いやり」、「我慢する」などがあたりまえのこととして行動されています。

鹿児島市民は、いつまでも雄大な桜島と錦江湾を代表とする郷土の自然を愛し、生物多様性の恵みに感謝しながら、21世紀後半も豊かな自然を将来の世代へ引き継ごうと積極的に取り組んでいます。

（イメージ図）

コラム　セヴァン・スズキ　伝説のスピーチ

「どうやって直すのかわからないものを、こわしつづけるのはもうやめてください」
1992年、リオデジャネイロで開催された地球サミットで、セヴァン・スズキという12歳の少女が、世界のリーダーたちを前に「伝説のスピーチ」を行いました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

こんにちは、セヴァン・スズキです。エコを代表してお話しします。エコというのは、子ども環境運動（エンヴァイロンメンタル・チルドレンズ・オーガニゼーション）の略です。カナダの12歳から13歳の子どもたちの集まりで、今の世界を変えるためにがんばっています。あなたたち大人のみなさんにも、ぜひ生き方を変えていただくようお願いするために、自分たちで費用をためて、カナダからブラジルまで1万キロの旅をしてきました。

今日の私の話には、ウラもオモテもありません
なぜって、私が環境運動をしているのは、私自身の未来のため。自分の未来を失うことは、選挙で負けたり、株で損したりするのとはわけがちがうんですから。
私がここに立って話をしているのは、未来に生きる子どもたちのためです。世界中の飢えに苦しむ子どもたちのためです。そして、もう行くところもなく、死に絶えようとしている無数の動物たちのためです。
太陽のもとにでるのが、私はこわい。オゾン層に穴があいたから。呼吸をすることさえこわい。空気にどんな毒が入っているかもしれないから。父とよくバンクーバーで釣りをしたものです。数年前に、体中ガンでおかされた魚に出会うまで。そして今、動物や植物たちが毎日のように絶滅していくのを、私たちは耳にします。それらは、もう永遠にもどってはこないんです。
私の世代には、夢があります。いつか野生の動物たちの群れや、たくさんの鳥や蝶が舞うジャングルを見ることです。でも、私の子どもたちの世代は、もうそんな夢をもつこともできなくなるのではないか？あなたたちは、私ぐらいの歳のときに、そんなことを心配したことがありますか。
こんな大変なことが、ものすごいいきおいで起こっているのに、私たち人間ときたら、まるでまだまだ余裕があるようなのんきな顔をしています。まだ子どもの私には、この危機を救うのになにをしたらいいのかはっきりわかりません。でも、あなたたち大人にも知ってほしいんです。あなたたちもよい解決法なんてもっていないっていうことを。オゾン層にあいた穴をどうやってふさぐのか、あなたは知らないでしょう。死んだ川にどうやってサケを呼びもどすのか、あなたは知らないでしょう。絶滅した動物をどうやって生きかえらせるのか、あなたは知らないでしょう。そして、今や砂漠となってしまった場所にどうやって森をよみがえらせるのか、あなたは知らないでしょう。
どうやって直すのかわからないものを、こわしつづけるのはもうやめてください。

ここでは、あなたたちは政府とか企業とか団体とかの代表でしょう。あるいは、報道関係者か政治家かもしれない。でもほんとうは、あなたたちもだれかの母親であり、父親であり、姉妹であり、兄弟であり、おばであり、おじなんです。そしてあなたたちのだれもが、だれかの子どもなんです。
私はまだ子どもですが、ここにいる私たちみんなが同じ大きな家族の一員であることを知っています。そうです50億以上の人間からなる大家族。いいえ、じつは3千万種類の生物からなる大家族です。国境や各国の政府がどんなに私たちを分けへだてようとしても、このことは変えようがありません。私は子どもですが、みんながこの大家族の一員であり、ひとつの目標に向けて心をひとつにして行動しなければならないことを知っています。私は怒っています。でも、自分を見失ってはいません。私はこわい。でも、自分の気持ちを世界中に伝えることを、私はおそれません。

私の国でのむだづかいはたいへんなものです。買っては捨て、また買っては捨てています。それでも物を浪費しつづける北の国々は、南の国々と富をわかちあおうとはしません。物がありあまっているのに、私たちは自分の富を、そのほんの少しでも手ばなすのがこわいんです。

カナダの私たちは十分な食べものと水と住まいを持つめぐまれた生活をしています。時計、自転車、コンピューター、テレビ、私たちの持っているものを数えあげたら何日もかかることでしょう。

２日前ここブラジルで、家のないストリートチルドレンと出会い、私たちはショックを受けました。ひとりの子どもが私たちにこう言いました。

「ぼくが金持ちだったらなぁ。もしそうなら、家のない子すべてに、食べものと、着るものと、薬と、住む場所と、やさしさと愛情をあげるのに」

家もなにもないひとりの子どもが、わかちあうことを考えているというのに、すべてを持っている私たちがこんなに欲が深いのは、いったいどうしてなんでしょう。

これらのめぐまれない子どもたちが、私と同じぐらいの歳だということが、私の頭をはなれません。どこに生れついたかによって、こんなにも人生がちがってしまう。私がリオの貧民街に住む子どものひとりだったかもしれないんです。ソマリアの飢えた子どもだったかも、中東の戦争で犠牲になるか、インドで物乞いをしていたかもしれないんです。

もし戦争のために使われているお金をぜんぶ、貧しさと環境問題を解決するために使えば、この地球はすばらしい星になるでしょう。私はまだ子どもだけどそのことを知っています。

学校で、いや、幼稚園でさえ、あなたたち大人は私たち子どもに、世の中でどうふるまうかを教えてくれます。たとえば、

争いをしないこと　　話しあいで解決すること　　他人を尊重すること

ちらかしたら自分でかたずけること　　ほかの生き物をむやみに傷つけないこと

わかちあうこと　　そして欲ばらないこと

ならばなぜ、あなたたちは、私たちにするなということをしているんですか。

なぜあなたたちが今こうした会議に出席しているのか、どうか忘れないでください。そしていったいだれのためにやっているのか。それはあなたたちの子ども、つまり私たちのためです。みなさんはこうした会議で、私たちがどんな世界に育ち生きていくのかを決めているんです。

親たちはよく「だいじょうぶ。すべてうまくいくよ」といって子どもたちをなぐさめるものです。あるいは、「できるだけのことはしてるから」とか、「この世の終わりじゃあるまいし」とか。しかし大人たちはもうこんななぐさめの言葉さえ使うことができなくなっているようです。

おききしますが、私たち子どもの未来を真剣に考えたことがありますか。

父はいつも私に不言実行、つまり、なにをいうかではなく、なにをするかでその人の値うちが決まる、といいます。しかしあなたたち大人がやっていることのせいで、私たちは泣いています。あなたたちはいつも私たちを愛しているといいます。しかし、いわせてください。もしそのことばがほんとうなら、どうか、ほんとうだということを行動でしめしてください。

最後まで私の話をきいてくださってありがとうございました。

出典：『あなたが世界を変える日』（セヴァン・カリス＝スズキ著、ナマケモノ倶楽部　編・訳、学陽書房）

2　2021 年度の鹿児島市の姿

鹿児島市の 2050 年の望ましい将来像を実現させるために、本戦略の最終年度である 2021 年度（平成 33 年度）の鹿児島市の姿を次のように設定し、具体的な取組の展開を図ります。

様々な人たちが生物多様性を保全することの意味や価値について理解し、協働して 2050年の鹿児島市の将来像を実現していこうという気運が高まり、生物多様性の損失を止めるための様々な取組が始まり進んでいる。

3　取組の基本方針

次の 3 つの基本方針に基づき、総合的かつ計画的に取組を進めていくこととします。

基本方針 1　生物多様性を支える自然環境を保全・創造する

生物多様性がより豊かな方向に向かうようにするために、生物多様性を劣化させるような影響を回避・最小化して、生き物が棲みやすい自然環境を保全・創造します。

基本方針 2　生物多様性を支える人を育む

生物多様性を保全しながら、それといつまでも共に暮らしていくために、私たち人間が自然・生態系の中の一部として自然や他の生き物たちと共に暮らしていることに気づき、どうすべきか考え、行動する人を育みます。

基本方針 3　生物多様性を支える社会のしくみを整える

生物多様性を意識することが社会に浸透し、事業活動や日常生活において生物多様性への配慮や保全の取組が行われると共に、自然・生き物が暮らしの資源、観光資源などとして持続可能な方法で利用されていく社会のしくみを整えます。

4 取組の基本姿勢

次の 3 つの基本姿勢で、生物多様性の保全に取り組みます。

☑ 気づく

暮らしや活動と自然との関係（恵み・脅威）、生態系のしくみなどについて気づき、興味・愛着を抱きます。

☑ 考える

地域にとって好ましい自然とは何か、市民、事業者、市民活動団体などの様々な立場で何ができるかを考えます。

☑ 行動する

鹿児島市の恵み豊かな自然を持続可能な方法で利用しながら守り育み、より良い状態で将来の世代へ引き継いでいけるようみんなで行動します。

5　取組を実施するにあたっての基本的視点

次の６つの視点で、取組を企画・実施します。

予防と順応の視点

科学的知見が完全ではないからと対策を先延ばしせず、情報収集と的確なモニタリングを進めながら、取組を早めに実施するという予防の視点が必要です。また、自然は変化し、私たちの暮らしも変化すること、科学的知見の充実などに伴い評価や対応策も変わることから、これらに順応性を持って対応する視点も必要です。

地域に即した視点

生物多様性の保全と持続可能な利用を進めるにあたっては、自然やそこに暮らす人々に個性があるように、地域によって手法も異なり、一律ではないことから、地域に即した視点で取組のしくみを考えることが必要です。

つながりの視点

暮らしと自然とのつながり、森林と海など生態系どうしのつながり、食料の輸入や動物たちの移動など世界、国内、隣接地域とのつながりの視点が必要です。

連携・協働の視点

生物多様性の保全と持続可能な利用の取組には、市、事業者、市民活動団体などがそれぞれの長所を生かしながら連携・協働することにより、活動がより効果的になり、発展することが期待されることから、連携・協働の視点が必要です。

統合の視点

生物多様性は、地球温暖化の防止、資源の有効利用などの取組と深く関わっていることから、これらと連携・調整した統合的視点が必要です。

長期的な視点

社会経済活動は短期的な生産性・効率性を求めがちですが、生き物の生息・生育を安定的に確保するためには長い期間が必要であり、また私たちは生物多様性から長期的・継続的に恵みを享受していることなどから、自然の価値や活動のあり方などについて長期的な視点から考えることが必要です。